

## 副助詞研究の可能性

小柳 智一 (福岡教育大学)

## 要旨

副助詞を「副詞性の助詞」とする立場から、副助詞研究の可能性を示す。まず、「副助詞」を創案した山田孝雄の研究に立ち戻り、副詞性の内実を「事態の様相に関わる量を表す」という点に求め、副助詞にもこの副詞性が認められることを指摘する。この捉え方は、とりたて研究で重要となる様々な観点に論理的な根拠を与える。次に、中古語の副助詞の体系についての見通しを述べる。中古語の副助詞は、対象範囲(とりたて研究の「フォーカス」「スコープ」とは別)に注目して、直前部だけを対象範囲とする第1種副助詞と、句全体を対象範囲とする第2種副助詞に大きく分けられ、それぞれは数量性と様相性の違いによって分類・体系化できると考えられる。

キーワード：とりたて詞、副詞、数量性、中古語

Possibilities for Research on *Fukujoshi*

KOYANAGI Tomokazu (Fukuoka University of Education)

## Abstract

This study investigates the possibilities for research on *fukujoshi* (adverbial particles) by looking at *fukujoshi* as *joshi* (particles) which have adverbial quality (*fukushisei*). I begin by examining the research of Yoshio Yamada, who first defined *fukujoshi*. I suggest that by considering the essence of adverbial quality (*fukushisei*) as indicating quantity in relation to modality, we can also say that *fukujoshi* also have adverbial quality. This interpretation provides a logical base for the study of *toritateshi* (focal particles). Next I discuss the *fukujoshi* system of Heian period Japanese. *Fukujoshi* in Heian Japanese can be categorized as 'first category *fukujoshi*,' that is, *fukujoshi* that function in relation to the preceding words, or 'second category *fukujoshi*,' *fukujoshi* that function in relation to the clause that they are located in. These

*fukujoshi* may be further categorized according to differences in quantity and modality.

**Keywords** : focal particles, adverbial, quantity, Heian Japanese

## はじめに

伝統的に「副助詞」と呼ばれてきた語類は、現代では「とりたて詞」とされるのが一般的になっている。これは、それまでの研究で副助詞の本質が明確にされず、雑多な助詞の寄せ集めのように見えたことが要因の1つになっていると思われる。本稿は、副助詞の本質を「副詞性の助詞」とする立場から検討し、その上で、中古語の副助詞の体系について見通しを述べる。それによって、副助詞研究の可能性を示そうと思う。

## 1. 副助詞

### 1.1 とりたて詞

最初に、とりたて詞について簡単に確認する。沼田(2000)によれば、とりたて詞は(1)のように定義され、(2)がその所属語である。(1)の下線部は、後で言及する、とりたて研究で重要となる観点である。

- (1) とりたて詞は、文中の種々な要素を「自者」とし、自者と範列的に対立する他の要素を「他者」とする。そして、自者について明示される文である「主張」と、他者について暗示される文である「含み」を同時に示し、両者の論理的関係を表す。論理的関係は、「断定」と「想定」、「肯定」と「否定」のような対立する概念で表される。 (沼田 2000 : p.215 / 下線は引用者。以下同)
- (2) も、でも、すら、さえ、まで、だって、だけ、のみ、ばかり、しか、こそ、など、なんか、なんて、なんぞ、くらい(ぐらい)、は
- (2)は、伝統的な助詞分類で、副助詞・係助詞とされる語類である。ただし、とりたて研究では、(1)の用法に適合しない場合、例えば、「心憎いまで理解している」の「まで」や、提題の「は」などは、とりたて詞から除くので、とりたて詞と副助詞・係助詞の外延は一致しない。つまり、とりたて詞とは、副助詞・係助詞の中から、(1)の用法の場合を集めて編成した語類のことであり、(1)以外の用法の場合は必然的に別類になる。

したがって、とりたて研究では、同じ形式(例えば「まで」「は」など)がとりたて詞とそうでないものに分散することになり、また、とりたて詞の内部には様々な質のもの(副助詞・係助詞と区別されてきたもの)が混在する可能性がある。こうしたことを問題視して、改めて副助詞と係助詞の区別を考察することも行われている(丹羽 2006, 宮地 2007 など)。

このことを確認した上で、本稿では、「副助詞」を創案した山田孝雄の説に戻り、副助詞の本質を考えることから始める。

### 1.2 副詞性の助詞

副助詞の創案者である山田孝雄は、副助詞を次のように説明している。

- (3) 句の構成分子にはいづれにも通じて付属しうべきものにして、しかもその下に来る述格に立つ用言の意義に対して副詞の如き性質をあらはして修飾限定するものなり。《中略》この一類の助詞はその意義を見れば、大略属性の副詞に対比するものにして、自然英語などの副詞に似たる点あるものにして、これらを英語などにて訳したるを見るに多くは彼れの副詞を用ゐて之にあてたり。これはその性質の似たるが故なるべし。 (山田 1936 : pp.403-404)

このように、副助詞は「副詞性の助詞」として創案された<sup>1</sup>。周知のように、山田は副詞に属性副詞と陳述副詞を設け、属性副詞をさらに情態副詞と程度副詞に分けたが、副助詞をその属性副詞に通じるものと捉えている。しかし、これには従いがたい。「副詞性の助詞」と捉えることの意義が失われてしまうからである。副詞性の内実を明確にするために、副詞の中心である、山田の設けた情態・程度・陳述の3副詞について簡単に見てみよう。次の(4)は情態副詞、(5)は程度副詞、(6)は陳述副詞の例である。後の論述のために、中古語の例を挙げるが、現代語でも同じである。

- (4) 海の面うらうらと風ざわたりて、(海面はゆったりと一面風いで)  
(源氏物語・須磨：源氏物語大成 p.435 / 情態副詞)

<sup>1</sup> (3)の後半に英語との対照が書かれているが、参考程度の話で、このこと自体はあまり重要でない。ある言語にとって、それと全く別の言語がどのような仕組みになっているかは、一義的に有意味なことではない。

(5) 顔はいと赤くすりなして立てり。(顔はこすって大層赤くして立っている) (源氏物語・若紫:p.156/程度副詞)

(6) 必ずよからぬ事, 出で来なむ。(きっとよくない事が起こるだろう) (源氏物語・賢木:p.349/陳述副詞)

このうち、情態副詞は川端(1964)などの指摘する通り、形容詞・形容動詞と同類であり、真に副詞らしい副詞ではない。(4)の「うらうらと」は形容動詞「のどかに」と類義的である。また、やや先走ることになるが、情態副詞を含めて副助詞と共通する副詞性を考えても無意味である。副助詞は、情態と言えような意味を表さないからである。例えば、(7)の「のみ」は情態的な意味を表してはいない。

(7) はかなき風の音にも目のみ覚めつつ、(かすかな風の音にも目が覚めてばかりいて) (源氏物語・宿木:p.1712)

真に副詞らしい副詞は程度・陳述の副詞で、これらはともに事態の量を表すという共通点がある。(5)の「いと」は、現に存在する「顔を赤くすりなす」という事態が有する度合の高さを表し、(6)の「必ず」は、「よからぬ事出で来」という事態が成立する確率の高さを表している。度合や確率は量の一種なので、程度副詞は事態の存在に関わる量を、陳述副詞は事態の成立に関わる量を表すと言える。さらに、存在と成立は、事態が本質的に有する在り方(様相)の2つの側面なので、程度副詞と陳述副詞は、事態の様相に関する量を表すと言える。したがって、真に副詞らしい副詞の特徴は、次のようにまとめられる。これが副詞性である<sup>2</sup>。

(8) 事態の様相(存在または成立)に関わる量を表す。

副助詞を「副詞性の助詞」と捉える立場では、(8)のうち特に量性を重視することになる。

### 1.3 副助詞の量性

副助詞の量性はどのような点に認められるだろうか。中古の「ばかり」を例に考える。「ばかり」には限定・概数量・程度の3つの用法がある(小柳1997a)。以下がその例である。

<sup>2</sup> 詳しくは小柳(2005)・小柳(2007)を参照。

(9) 月影ばかりぞ、八重葎にも障らずさし入りたる。(月の光だけが、生い茂る雑草にも邪魔されず差し込んでいる)

(源氏物語・桐壺:p.12/限定)

(10) 宿直にさぶらふ人、十人ばかりして、参り給ふ。(宿直としてお控えする人を、十人くらい連れて、参上なさる)

(源氏物語・東屋:p.1829/概数量)

(11) さばかり烈しかりつる波風に、いつの間にか舟出しつらむ。(あれほど波風が激しかったのに、いつの間に船出したのだろうか)

(源氏物語・明石:p.447/程度)

(10)の概数量(「十人」を概数化)と、(11)の程度(「さばかり」全体で程度副詞に相当)には、容易に量性が見て取れるだろう。(9)の限定は、(月の光)だけが入って来て、(獣)や(人)などは入って来ないことを言うので、一見、量に関わらないように見える。しかし、入って来うる事物の集合から(月の光)だけを示し、それ以上の事物がないというのは、数の集合から1だけを示し、2以上はないというのと類比的で、事物を数(集合の要素)として扱っている。数として扱うこと、すなわち事物の数的把握(いくつあるか)は、事物の量的把握(どれくらいあるか)を基盤とすると考えられるので<sup>3</sup>、ここに量性が認められる。

したがって、副助詞は量性(以下、副助詞については「数量性」と言う)を表す点で副詞と共通し、これによって、副助詞を「副詞性の助詞」と捉えることができる。山田の説は、このように修正を加えた上で継承される。なお、副助詞の数量性を明確に指摘したのは、森重(1954)が最初である。

ところで、先掲(1)のとりたて詞の定義には、とりたて研究で重要になる観点が含まれていた(下線部)。副助詞の本質を数量性に見る立場は、それらの事柄がなぜ観点になりうるかを説明する<sup>4</sup>。

まず、副助詞の数量性は、いくつもの要素を含む集合を対象とすることに

<sup>3</sup> 数えられる事物を、まず一まとまりの全体として捉え(量的把握)、それを単位1によって分割して計ったのが数的把握である。詳しくは小柳(2006)を参照。

<sup>4</sup> とりたて詞が数量詞と類似することが指摘されているが(江口2007)、これも副助詞の数量性ゆえである。

現れるが、その集合内の1つの要素に言及すれば、必然的に、他の要素との関係を含意することになる。これが、(1)に示したとりたて詞の定義中の、「自者」についての「主張」と、「他者」についての「含み」である。

次に、数の根本は1と2以上、つまり単複である。集合からある要素1つだけを取り出せば、その他は取り出されない。つまり単数的である。一方、ある要素をいくつかの要素とともに取り出せば、そのいくつかの要素はある要素と同じように取り出される。つまり複数的である。これを判断の観点から見れば、前者はある1つの肯定と他の否定、後者はある1つの肯定とその他の肯定となる。これが(1)の中の「肯定」と「否定」の対立である。

最後に、集合内の要素が序列をなす時(序数性は数の基本的な性質の1つ)、我々が、ある要素に対して、それが標準的か否かという見込みを持つことは自然なことである。ただし、この見込みと実際の間には齟齬の生じることがある。例えば、3つはあってもよさそうだと見込まれるのに1つしかない、4つはないだろうと見込んだが5つもあった、というように。これが(1)の「想定」と「断定」の対立の起源となる。

このように、本稿の述べる副助詞研究は、とりたて研究と背反せず、むしろ、とりたて研究の観点に論理的な根拠を与えるものだと言える。

## 2. 中古語における2種類の副助詞

### 2.1 統語的特徴による分類

次に、中古語の副助詞の整理を行う。取り上げるのは「ばかり」「まで」「のみ」「さへ」「だに」「など」である<sup>5</sup>。中古語の副助詞は、3つの統語的特徴によって、大きく2種類に分けられる(近藤 1995, 小柳 1997b)。

第1に、格助詞と承接する時、前置するか後置するか。「ばかり」は格助詞に前置、「のみ」「さへ」「だに」は後置、「など」は前置も後置もする。「まで」は格助詞と承接しない。

<sup>5</sup> 「すら」は主に漢文訓読文で用いられ、他の副助詞と文体的位相を異にするので、措く。また、「より」には副助詞の側面も認められるが、このことの十分な記述を行っていないので、やはり措く。いずれも別の機会に譲る。

- (12) 直衣ばかりを取りて (源氏物語・紅葉賀:p.258)
- (13) 光をのみ添へ給ふ御容貌など (源氏物語・行幸:p.890)
- (14) 仏の道にさへ通ひ給ひける御心 (源氏物語・御法:p.1382)
- (15) 六条わたりだにかれまさり給ふめれ (源氏物語・末摘花:p.218)

- (16) 大殿などにもかかることありて (源氏物語・夕顔:p.131)
- (17) 京になど迎へ給ひてのち (源氏物語・蜻蛉:p.1960)

第2に、連用修飾成分に後接するか否か。「のみ」「さへ」「だに」「など」は連用修飾成分に後接するが、「ばかり」「まで」は後接しない。

- (18) 兎のやうにのみもてなし聞こえ給へれば(源氏物語・少女:p.672)
- (19) 相ひ見まほしくさへ思さる (源氏物語・濤標:p.503)
- (20) あたり近くだに寄せず (源氏物語・少女:p.698)
- (21) 心にくくけ高くなどもてなして (源氏物語・紅梅:p.1448)

第3に、副助詞同士が承接する時、前置するか後置するか。「ばかり」「まで」は前置、「のみ」「さへ」「だに」は後置、「など」は前置も後置もする。

- (22) 東声したる者どもばかりのみ出で入り(源氏物語・東屋:p.1839)
- (23) 年のうちに一日までだにあらじ (枕草子・87段:大系 p.135)
- (24) 水際はただ一尺ばかりだになきに (枕草子・306段:p.315)
- (25) 八つ、九つ、十ばかりなどの男児の (枕草子・151段:p.207)
- (26) 色あひなどさへ掲焉にあらはれたるを(紫式部日記:新大系 p.265)

以上を整理すると、次表のようになる。

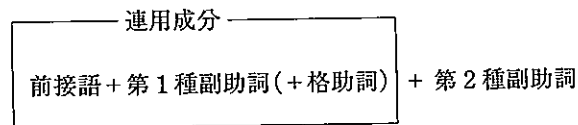
表1 統語的特徴による副助詞の分類

統語的特徴	第1種副助詞		第2種副助詞			
	ばかり	まで	のみ	さへ	だに	など
格助詞との承接	前置	×	後置	後置	後置	前置・後置
連用修飾成分に後接	×	×	○	○	○	○
副助詞同士の承接	前置	前置	後置	後置	後置	前置・後置

この表から、中古の副助詞は、「ばかり」「まで」と、「のみ」「さへ」「だに」の2群に分かれることがわかる。以下、前者を「第1種副助詞」、後者を「第2種副助詞」と呼ぶことにする。「など」は両方にまたがる。

## 2.2 焦点、対象範囲、集合の構成基準

表1に整理した2種類の副助詞の出現位置は、次のように図示することができる。2つの相違は、結局、第1種副助詞が連用成分内に現れるのに対し、第2種副助詞は連用成分に外接するという点である。



このことから、第1種副助詞は前接語とだけ関わり、第2種副助詞は前接する連用成分だけでなく、その係る述語まで含めた句(clause)全体に関わると考えるのが自然だろう<sup>6</sup>。具体例で示せば、(27)(28)の[ ]内がそれぞれの関わる範囲である。

(27) [直衣]ばかりを取りて(直衣だけを取って) <<(12)の再掲>>

(28) [光をのみ添へ給ふ]御容貌など(光をお加えになる一方のお姿など) <<(13)の再掲>>

[ ]の範囲を「対象範囲」と仮称すると、対象範囲は、副助詞が対象とする集合に含まれる当該要素を表す。(27)では〈直衣〉、(28)では〈光を加える事〉が当該要素である。この時、(27)の場合は、集合の構成基準が述語「(身に付けるために)取る」によって示され、〈取りうる物〉の集合の中の〈直衣〉と理解される。一方、(28)の場合は、集合の構成基準は表現されず、文脈によって〈光源氏が成長する過程でありそうな事〉と推測される。そのような事態の集合の中の〈光を加える事〉である。要するに、第1種副助詞は直前部を対象範囲とし、直前部の表す当該要素を含む集合の構成基準は、

<sup>6</sup> このことを、小柳(1997b)では「ばかり」と「のみ」を比較して詳しく述べた。なお、この考えには、丹羽(2005)の批判をいただき、まだそれにお応えしていないが、現在でも有効だと考えているので、この前提に立って進める。

述語が表す。これに対して、第2種副助詞は句を対象範囲とし、句の表す当該要素を含む集合の構成基準は、文脈による。

ところで、第1種副助詞は対象範囲の直後に現れ、対象範囲を直接的に指定するが、第2種副助詞は対象範囲の中に割って入り、第1種副助詞のように対象範囲を指定しない。第2種副助詞があれば、それを含む句が対象範囲であることはわかるので問題はないが、だからと言って、句中のどこに現れてもよいというわけではないだろう。次の(29)(30)では、「のみ」は $\phi$ の位置にも現れうるが( $\phi$ に現れても対象範囲は変わらない)、実際には(29)(30)の通りの位置にある。

(29) つれづれにひ行ひをのみしつ、(みな所在なく勤行するばかりで)  
 <源氏物語・手習:p.2004>

(30) 我につれなき人の御心をひ尽きせずのみ思し嘆く。(自分に冷淡なあの人の気持ちを、いつまでも嘆いてばかりいらっしやる)  
 <源氏物語・葵:p.283>

「のみ」は、直前部を何らかの点で卓立的に指定していると考えざるをえないと思う。そうでないと、その位置に現れているのは偶然ということになってしまう。しかし、直前部は、文の論理的意味に影響せず(「のみ」を $\phi$ へ移しても対象範囲は変わらず、全体の意味も変わらない)、情報論的に重要でもなさそうである(直前部だけが未知で、他の部分は既知というわけではない)。とすれば、情意・認識的に卓立される部分(平たく言えば、気持ちが込められるところ、意識が集中するところ)ということになるだろう。全体を前提としてその中の卓立される部分を「焦点」と呼べば、第2種副助詞の指定するのは、情意的・認識的な焦点だと言える<sup>7</sup>。

第1種副助詞はどうだろうか。第1種副助詞は、述語を集合の構成基準とするので、意味上、述語を指向する。連用成分と述語からなる句全体を前提とし、第1種副助詞は直前部を指定しているから、これもやはり焦点である。ただし、第1種副助詞の焦点は論理的意味に関わる。次の(31)では「ばかり」を $\phi$ の位置に移すと意味が変わり、〈 〉のようになる。

<sup>7</sup> 益岡(1991)の「命題の意味的な主要素」が焦点になる場合(p.184)というのは、相違する点はあるが、方向を同じくする分析だろう。

- (31) 所々ゆには御文ばかりぞ奉り給ふ。(あちらこちらの女性の所にはお手紙だけを差し上げなさる) 〈源氏物語・葵:p.306〉  
《あちらこちらの女性の所だけにはお手紙を差し上げなさる》

整理すると、次表のようになる。第1種副助詞は焦点と対象範囲が一致するが、第2種副助詞は一致しない。なお、副助詞(特に第2種副助詞)の焦点の問題は、係助詞の焦点の問題とも関連し、さらに考察を要する<sup>8</sup>。

表2 焦点・対象範囲・集合の構成基準

	焦点	対象範囲	集合の構成基準
第1種副助詞	直前部(論理的)	直前部	述語
第2種副助詞	直前部(情意・認識的)	句全体	文脈

### 2.3 フォーカス、スコープ

上述のことは、とりたて研究の「スコープ」「フォーカス」を想起させる。沼田・徐(1995)はスコープとフォーカスを次のように定義している。

- (32) とりたてのスコープとは、とりたて詞が文中で意味的に影響を及ぼし得る最大の領域で、当該のとりたて詞によって、他と範列的な対立関係をなすと捉えられる、文中の範囲である。《以下略》  
〈沼田・徐 1995:p.177〉

(33) とりたてのフォーカスとは、とりたてのスコープ内にある要素で、文脈等の語用論的情報から、他との範列的な対立関係を集約的に表す要素(つまり自者)、と捉えられる構成素の範囲である。最大のフォーカスはスコープと一致する。〈沼田・徐 1995:p.177〉  
そして、フォーカスには「直前(N(ormal))フォーカス」「後方移動(B(ackward))フォーカス」「前方移動(F(oreward))フォーカス」の3種類があり、どれになるかは、スコープとの関係で決まると言う。2.2に関わる、とりたて詞が連用成分に後接する場合は、次のように示されている。

- (34)a. スコープ=フォーカス → Bフォーカス  
b. スコープ≠フォーカス → Nフォーカス

<sup>8</sup> 係助詞の焦点の問題は、野村(2001)が詳しく論じている。

現代語の例(沼田 2000 の挙例)を引くと、(35)が(34a)のBフォーカス、(36)が(34b)のNフォーカスの例である。スコープを [ ] で、フォーカスを [ ] で示す。

- (35) [【代金だけもらって】], 仕事をしない。  
(36) [【ここ】だけにある]。

これと中古語の例を並べると、(37)の「ばかり」はNフォーカス、(38)の「のみ」はBフォーカスとなりそうである。

- (37) [直衣] ばかりを取りて 〈(27)の再掲〉  
(38) [光をのみ添へ給ふ] 御容貌など 〈(28)の再掲〉

しかし、本稿の焦点・対象範囲と、とりたて研究のフォーカス・スコープは別物である。対象範囲とフォーカスは外延が一致するが、本稿の焦点に当たるものはとりたて研究になく、とりたて研究のスコープに当たるものは本稿で用意していない。したがって、分析の仕方も異なる。フォーカスとスコープだけでは、(35)のように、とりたて詞の位置(「代金」の後)と意味(「代金をもらう」がフォーカス)が合致しない場合を十分に記述できないと思われる<sup>9</sup>。スコープは否定との関係などで確かに有効だが、射程の広い装置なだけに、係結や副詞も考慮に入れなければならない。また、本稿の範囲ではスコープに当たるものを必要としないので、今はこれ以上追究しない。

## 3. 中古語の副助詞の体系

### 3.1 第1種副助詞

最後に、これまでの研究も踏まえて、中古語の副助詞の体系について見直しを述べる。まず、第1種副助詞に属する「ばかり」と「まで」の2つの意味は、次のように規定できる(小柳 1997a, 小柳 1999)。

- (39) ばかり 要素間に序列のある集合から、ある要素を取り出して示す。  
(40) まで 要素間に序列のある集合から、ある要素を取り出し、その要素に至るまでの全要素を含めて示す。

<sup>9</sup> (36)のような場合も、スコープは余剰で、実際にはフォーカスだけで説明しているように見える。いずれにせよ、フォーカスとスコープによる説明の仕方は再検討してみる必要があると思う。

「ばかり」と「まで」は、要素間に序列のある集合を対象とする点で共通し、取り出した要素が単数か複数かという点で対立する。単複は数の根本なので(1.3)、これに従って第1種副助詞が分化するのは必然である。

第1種副助詞は直前部を対象範囲とし、それが集合の要素を表す。要素には事物・数量・事態の場合があり、(9)-(11)に示した「ばかり」の限定・概数量・程度の用法は、これに対応している。また同様に、「まで」も極限・延長・持続・極度という用法<sup>10</sup>が、集合の要素の種類に対応してある。

(41) 仏の御面目ありと、あやしの法師ばらまで喜びあへり。(仏の御面目が立つと、身分の低い法師連中まで喜び合っている)

〈源氏物語・賢木:p.359／極限〉

(42) 桂川のもとまで物見車隙なし。(桂川のほとりまで隙間なく物見車が並んでいる)

〈源氏物語・行幸:p.885／延長〉

(43) 昨日まで高き親の家にあがめられかしづかれし人の女の、(昨日まで身分の高い親の家で大切に育てられていた娘が)

〈源氏物語・若菜上:p.1036／持続〉

(44) かうまでことことしうもてなし思さじ。(こんなにまで大げさにお世話をなさることはあるまい)〈源氏物語・行幸:p.907／極度〉

詳しい説明は割愛するが、「ばかり」と「まで」の用法は、それぞれ次のように対になり、小さな体系をなしている(小柳 2000)。

表3 第1種副助詞の体系

	事物の集合	数量の集合	事態の集合
単数的：ばかり	限定	概数量	程度
複数的：まで	極限	延長・持続	極度

### 3.2 第2種副助詞

第2種副助詞に属するのは「のみ」「さへ」「だに」である。これらは句全体を対象範囲とし、句は事態を表すので、事態の集合を対象とすると考えられる。先に(8)で、副詞性を「事態の様相(存在または成立)に関わる量を表

す」とまとめたが、事態に関わる第2種副助詞は、第1種副助詞より副詞との関連が強い。事態の様相には存在と成立の側面があり、程度副詞は存在に関わる量を、陳述副詞は成立に関わる量を表すのだった(1.2)。第2種副助詞は、この程度副詞・陳述副詞に対応して、「のみ」「さへ」は存在する事態に関する数量を、「だに」は事態の成立に関する数量を表すと捉えることができる。

まず、「のみ」は、当該事態1種類だけが存在し、それ以外の種類の事態がないことを表す(小柳 1998)。これに対して、「さへ」は、当該事態が、先行する他の事態に累加して存在することを表す。「さへ」はある事態に別の事態を加えるので、結果的に複数の種類の事態が存在し、1種類の事態だけが存在する「のみ」と対比的である。ここに「のみ」「さへ」の数量性が認められ、やはり単複によって分化している。

(45) 光をのみ添へ給ふ御容貌など(光をお加えになる一方のお姿など)  
〈(28)の再掲〉

(46) 行く先多く夜もふけにければ、《中略》神さへいといみじう鳴り、雨もいたう降りければ、(道のりが遠く夜も更けてしまったので、《中略》そのうえ雷までひどく鳴って、雨も激しく降ったので)

〈伊勢物語・6段：日本古典文学大系 p.114〉

次に、「だに」は、当該事態が、成立する確率が高い(と予想されるのに成立しない)こと、あるいは逆に、成立する確率が低い(と予想されるのに成立すること)を表す(岡崎 1996)。つまり、事態の成立の確率について高低どちらかの極を表す。

(47) その人とは、さらに家の内の人にだに知らせず。(どこの誰かは、家の人にさえ全く教えない)〈源氏物語・夕顔:p.106／高確率〉

(48) 虫だに時節を知りたるよ。(虫でさえ時節を知っているものだよ)  
〈蜻蛉日記・下：新大系 p.194／低確率〉

このように、「だに」は当該事態の成立する確率の高低を表すが、(47)では当然、より確率の低い事態(例えば隣家が事情を知る)なども成立しないことを含意し、(48)は、より確率の高い事態(例えば人が時節を知る)などが成立することを含意する。この含意が、表現されていない他の事態

<sup>10</sup>「まで」はこれらの他に、格助詞としての用法もある(小柳 1999)。

を推察させるので、「だに」の意味を「類推」と規定することがあるが、これは二次的なことだと考えられる。ただし、当該事態と関連する他の事態を含意するので、一往、複数的と見なせる<sup>11</sup>。

このように、第2種副助詞には数量性のみならず様相性も認められ、第1種副助詞よりも副詞との対応がはっきりしている。第2種副助詞は、真に副助詞らしい副助詞と言える。

### 3.3 中古語の副助詞の体系

最後に、「など」は第1種副助詞と第2種副助詞の両方にまたがる。意味は「例示」と言われるように、個別的な事物・事態を挙げ、それを含む上位の一般的・抽象的な対象(類・集合)を示す(小柳 2008)。「など」は言うまでもなく複数的である。

(49) 御地敷四十枚、御褥、脇息など、すべてその御具ども、いと清らにせさせ給へり。(御唐筵四十枚、御座布団、脇息など、すべて祝賀のための御調度品を、たいそう美しく用意なされた)

〈源氏物語・若菜上:p.1053〉

以上のように、中古の副助詞は、第1種副助詞と第2種副助詞に分かれ、数の根本である単複によって、それぞれ分化している。また、第2種副助詞は、存在性・成立性という様相性によっても分化している。表4の通りである。所属する副助詞が複数的な方に偏るのは、単数における分化より、複数における分化の方が多様になるはずなので、自然である。

<sup>11</sup>「一往」と言うのは、「だに」の対象範囲が表す事態は起こっているが、それよりも確率の高い事態は起こっていないという場合があるからである(例えば、虫でさえ時節を知っているのに、知っていてよさそうな人が知らない、など)。この場合、現実には起こっている事態は1種類しかないが、想定される事態を含めれば複数と見てよい。

表4 中古の副助詞の体系

	第1種	第2種		2つにまたがる
		存在性	成立性	
単数的	ばかり	のみ		
複数的	まで	さへ	だに	など

なお、この表は近藤(2003)が提示した、現代語の「副助詞」についての次表と共通するところがある。表5の「対立(限定)」「並立(添加)」は数の単複に対応し、数の原理の現れと解釈することができる。

表5 近藤(2003)からの引用

	対立(限定)	並立(添加)
尺度	(限定・程度) だけ・ばかり	(添加・極限) も・まで・さえ
個物	(特立) こそ	(例示) など・なんか

### 4. おわりに

副助詞を、「副詞性の助詞」として数量性と様相性を重視する立場から考察した。この立場は、とりたてて研究の観点到根拠を与え、中古語の副助詞の体系に対する見通しを披き(副助詞は雑多な助詞の寄せ集めではない)、また、焦点の問題を介して係助詞へ視野を拡張させる。さらに、副助詞をそれだけで孤立させず、副詞と関係づけて考えるので、文法体系の緊密性を高めることにもなる。これは、富士谷成章『あゆひ抄』(1778年刊)が「挿頭、脚結もてことばをたすく」と言い表した、副詞類と助詞・助動詞類の同質性・共通性を積極的に認める方向である。

以上、副助詞研究の可能性のいくつかを示した。



小柳 智一

## 参考文献

- 江口正 (2007) 「形式名詞から形式副詞・取り立て詞へ 数量詞遊離構文との関連から」  
青木博史(編)『日本語の構造変化と文法化』ひつじ書房。
- 岡崎正継 (1996) 『国語助詞論攷』おうふう。
- 川端善明 (1964) 「時の副詞(上) 一述語の層についてその一」『国語国文』33-11.
- 小柳智一 (1997a) 「中古のバカリについて 一限定・程度・概数量一」『国語と国文学』  
74-7.
- 小柳智一 (1997b) 「中古の「バカリ」と「ノミ」」『国学院雑誌』98-12.
- 小柳智一 (1998) 「中古の「ノミ」について 一存在単質性の副助詞一」『国学院雑誌』  
99-7.
- 小柳智一 (1999) 「中古のマデ 一第一種副助詞一」『国語学』199.
- 小柳智一 (2000) 「中古のバカリとマデ 一副助詞の小さな体系一」『国学院雑誌』101-2.
- 小柳智一 (2005) 「副詞と否定 一中古の「必ず」一」『福岡教育大学国語科研究論集』  
46.
- 小柳智一 (2006) 「上代の複数 一接尾語ラを中心に一」『万葉』196.
- 小柳智一 (2007) 「第1種副助詞と程度修飾句 一程度の構文とその形成一」青木博史  
(編)『日本語の構造変化と文法化』ひつじ書房。
- 小柳智一 (2008) 「複数と例示 一接尾語ラ追考一」『国語語彙史の研究』27
- 近藤泰弘 (1995) 「中古の副助詞の階層性について 一現代語と比較して一」益岡隆志・  
野田尚史・沼田善子(編)『日本語の主題と取り立て』くろしお出版。
- 近藤泰弘 (2003) 「名詞の格と副 一格助詞と副助詞の性質一」北原保雄(編)『朝倉日本  
語講座5 文法I』朝倉書店。
- 丹羽哲也 (2005) 「〔書評〕沼田善子・野田尚史(編)『日本語のとりたて一現代語と歴史  
的变化・地理的変異一』」『日本語の研究』1-2.
- 丹羽哲也 (2006) 「「取り立て」の概念と「取り立て助詞」の設定について」『文学史研  
究』46.
- 沼田善子・徐建敏 (1995) 「とりたて詞「も」のフォーカスとスコープ」益岡隆志・野  
田尚史・沼田善子(編)『日本語の主題と取り立て』くろしお出版。
- 沼田善子 (2000) 「とりたて」金水敏・工藤真由美・沼田善子(著)『時・否定と取り立  
て』岩波書店。
- 野村剛史 (2001) 「ヤによる係り結びの展開」『国語国文』70-1.
- 益岡隆志 (1991) 『モダリティの文法』くろしお出版。
- 宮地朝子 (2007) 『日本語助詞シカに関わる構文構造史的研究』ひつじ書房。
- 森重敏 (1954) 「群数および程度量としての副助詞」『国語国文』23-2.

山田孝雄 (1936) 『日本文学概論』宝文館。

## 付記

本稿は、日本語文法学会第8回大会(平成19年10月)のシンポジウムで発表した内  
容をほぼそのまま文章にしたものである。なお、本研究は、平成19年度科学研究費補  
助金(若手研究B)「様相性・数量性の観点から行う古代日本語における副助詞の研究」  
(課題番号17720101)による研究成果の一部である。

(最終原稿受理日2008年3月24日)